

ポピュラー音楽研究における 社会心理学的接近と社会史的接近

Popular Music Studies between Social Psychological Approach
and Social Historical Approach

大 倉 恭 輔

生活福祉学科准教授

Keywords : popular music studies, mass culture, modernization, mentality, method

はじめに

わが国のポピュラー音楽研究において、近代史の文脈から考察をおこなったものは多くない。たとえば、日本ポピュラー音楽学会誌である「ポピュラー音楽研究」に掲載された論考をみても、人類学/民族学的接近によるものやロック以降の音楽に関する文化社会学的接近によるものが中心となっている。(tab.1)

これに対し、メディア史研究や思想史研究の領域において、しばしばポピュラー音楽を題材とした論考をみることができるが、こちらは戦時下における放送や表現規制の文脈に焦点があてられる傾向にある。

その領域を問わず、諸学にあつては研究の着眼点や研究方法に流行があり、かつそれぞれの時代や社会的な状況に即したテーマが存在する。だが、そうした流行から一步離れてみると、わが国のポピュラー音楽研究において、近代化は重要な視座となるはずである。すなわち、明治維新を境としての西欧文化の受容とその過程をたどることは、今日のわれわれの社会や文化のあり方を問うための、基礎的な作業となるはずだからである。

本稿では、今後のポピュラー音楽研究の方向性を求めるにあたって、まず確認すべき点としての用語・概念の整理をおこない、いくつかの論点を提出するものである。

tab. 1 日本ポピュラー音楽学会誌 掲載論文一覧 (1997-2008)

- ◇ Prévert の歌における言葉と旋律の関係
- ◇ ポピュラー音楽における「作品」とは何かー記号学的考察の試み
- ◇ 計算機を用いたリズム・パターンの分類
- ◇ ロックの「時代精神」からオーディエンスへー文化研究とポピュラー音楽
- ◇ ロック音楽文化の三つの指標ー文化の社会学の一方法論として
- ◇ 民族文化の客体化と真正性保証
- ◇ 中部タイ農村部における民謡と大衆歌謡の相互作用的発展
- ◇ 'Yesterday Once More'の解釈について
- ◇ レコード産業における音楽制作機能の分散ー60年代における発生経緯とその要因
- ◇ ローカル・ジュークボックスー音楽の地方市場で形成される「生産の文化」について
- ◇ Pan in Japanー日本におけるスティールパンの受容と普及
- ◇ 音楽家による援助活動ーアメリカの食糧危機を事例として
- ◇ 戦後沖縄における民謡歌手の変容ー世代別活動スタイルの比較を通して
- ◇ 戦後ハワイで活躍した二世楽団
- ◇ 日本におけるラップ実践と人的ネットワークー二つのグループの実践を事例として
- ◇ ターンテーブルリズムにおけるDJパフォーマンスの音楽的分析
- ◇ 海勢頭豊インタビュー記録
- ◇ 「非-芸人」としてのストリートミュージシャンー「他者」の機能を中心に
- ◇ カバー曲史からみた台湾における日本のポピュラー音楽
- ◇ ハワイの「日本の歌」とナイト・クラブ
- ◇ 国内地方都市における音楽の産業化過程ー福岡市の場合
- ◇ 路上演奏者の公共感覚ー心斎橋の弾き語りシンガーを事例として
- ◇ 「黒い響き」との微妙な距離ー公民権運動期の代表的演説の音楽性の分析
- ◇ 沖縄音楽レコード制作における〈媒介者〉としての普久原朝喜ー1920-40年代・丸福レコードの実践を通して
- ◇ Love-and-Murder Ballads and Songs in Country Music
- ◇ 〈参加〉する聴衆ーフジロックフェスティバルにおけるケーススタディー
- ◇ 日本におけるミュージックビデオ受容空間の生成過程ーエアチェック・マニアの実践を通して
- ◇ 新聞記事・雑誌記事等にもみる「インディーズ」概念の定着過程
- ◇ ハワイの「日本の歌」と懐メロ・ブームーカラオケの時代と二世楽団への懐古
- ◇ 文化の公的支援とポピュラー文化
- ◇ 「エミネム」の文化社会学ーヒップホップ/ロックの真正性・正統性指標による「差別」表現の解釈

大衆と大衆社会

学問的にも一般的にも、映画やテレビなどとならび、ポピュラー音楽は「大衆文化/mass culture」の一部をなすものとして取り扱われる。ただし「大衆」という用語は、単なる「不特定多数」の人をさすわけではない。

社会学における「大衆/mass」概念は、19-20世紀にかけてのル=ボンやタルドの集合行動研究にその萌芽をもつ。そして、「社会的地位・階級・職業・学歴・財産などの社会的障壁を越えて構成される、異質性を特徴とする大多数の人々からなる集合体」として定義される。さらに、近代社会から現代社会への展開過程に生じた社会の形態変化のなかで、人々の「大衆化/massification」

がなされたとされる。

近代社会は、17-18世紀の西欧における「市民革命・産業革命」を契機に始まる社会をさす。このとき、「工業化・都市化・合理化」のセットをもって「近代化」とすることができよう。この近代の成立と大衆化の進展によって、「大衆社会/mass society」が成立する。すなわち、「移動性の増大・社会分化の進行・伝統的基盤や価値体系の崩壊・感情的紐帯の喪失」などによって特徴づけられる社会である。

そして、社会学における大衆社会論は、「現代社会論」という研究領域の一部とされることが多い。いいかえれば、それは近代社会の延長線上にあり、かつより今日性の高い特徴に注目して時代を理解しようとする試みである。(注1)

つけ加えるならば、大衆とは、当時、急速に普及しつつあったラジオを中心とするマスメディアによって結びつけられる都市生活者の謂であるといつてよい。同時に、そこから固有の問題点が提起される。

一方に、社会の(政治的・経済的)平準化があり、人々が社会のあらゆる側面に参加(の可能性が拡大)するようになる。もう一方で、伝統的基盤・規範の崩壊することで、アイデンティティの喪失・個人の欲望の肥大化が進展していく。

そのような状況から生まれるのは、エリートになれるが、エリートによって操縦されやすい存在である。このことから、大衆社会論におけるふたつの方向性が成立する。ひとつは、「民主主義的批判」であり、理想的民主主義を壊したファシズムへの批判。もうひとつは、「貴族主義的批判」であり、精神の貴族性を脅かす大衆の愚劣さへの批判である。

こうした分類・方向性は、近代化の進展に加え、ファシズムや社会主義の隆盛への対処が求められた、当時の社会的背景と関係する。すなわち、民主主義の可能性を問う必要である。そして、大衆論・大衆社会論は、「民主主義国家：アメリカ」で大きな進展を遂げる。同時に、社会背景が異なる今日において、大衆という概念に修正が求められることも事実である。

大衆文化とポピュラー文化

本項では、彼ら大衆が生み出す「大衆文化」とはどのようなものであるかについて整理をおこなう。

社会学的領域において、文化/culture という用語・概念は、文化人類学でのそれを援用することが一般的である。ことに、次のふたつの考え方にのっとることが多いといつてよい。

ひとつは、「生活様式の体系」であり、文化を「特定の社会の人々によって習得・共有・伝達される行動様式ないし生活様式」の体系(システム)とみるもの。もうひとつは、「自然環境に対する適応の体系」であり、人間が環境に適応するに必要な「技術・経済・生産に結びついた社会組織の諸要素が文化の中心」とみるものである。(吉田 1987)

これらの定義・用語法が、社会学および文化研究の領域においても有用なことは言をまたない。そして、その文化の一部としての「大衆文化/mass culture」は、以下のように定義されることが

一般的である。

- 大衆社会に対応する文化の形態。
- 高級文化/high culture と、その基層にある土着的な民俗文化/folk culture の間の中間文化。
- 資本主義の発展を基盤とし、生活・教育水準の向上と平準化およびマスコミュニケーションの発達による、文化の享受範囲の拡大から生まれたもの。

大衆社会の進展は、社会・生活のあらゆる場面に大きな影響を及ぼすこととなった。すなわち、テクノロジーの進展・人口の都市集中・大量生産/大量消費の拡大・交通手段やマスメディアの発達・組織の大規模化と複雑化・人口の都市集中化と新中間層の拡大などである。

これらのことから、生産労働の質的变化・生活様式の平均化と画一化・環境世界の時間的/空間的拡大が生じる。さらに、疑似環境の増大による大衆操作の容易化とともに、人間および人間関係の非人格化あるいは疎外感が増大する。かつての共同体が崩壊することにより、多元的で独立した中間集団の中で人々は孤立化・原子化してゆくこととなった。

その中であって、大衆は一時的な慰安のため、さまざまの「気晴らし/divertissement」を求めるようになる。たとえば、マスメディアからの情報やおしゃべりであり、飲酒・ギャンブルでありスポーツ・観光などである。すなわち、大衆文化の理解とは、近代化と大衆社会状況への理解なくしてはあり得ないものといえる。

しかし、そうした「大衆/大衆社会」観は、今日、再考を促されている。テクノロジーやマスメディアのさらなる発展に代表される社会状況の変化が、これまでの社会学理論の枠組みでは解釈困難な事態を生んでいるためである。それは同時に、「大衆文化」という用語法の見直しにつながるることとなる。

わが国の用語法では、大衆文化はいわゆる「ブルーカラー」の娯楽の対象というニュアンスを含んでいた。たとえば、大衆文学といえば、中里介山から山本周五郎・柴田錬三郎にいたる時代小説や吉川英治・山岡荘八から司馬遼太郎にいたる歴史小説群を指していた時期があった。

しかし、そうしたブルーカラーの娯楽/教養という概念自体、無効化しているといわざるを得ない。それ以前に、ブルーカラーという概念が失われているといってもよい。

このような変化を受け、近年、「ポピュラー文化」という用語法を使用するケースが散見される。従来の用語法では、ポピュラー文化/popular culture は「通俗文化」という語をあて、享受者の幅の広さ・マスメディアとの関連が大きなものを指していた。だが、高級文化がその威光を薄れさせ、民俗文化が生活の中から失われつつある状況を踏まえようとするとき、その両者の「中間文化」という位置づけは、少なくとも現代社会を理解するには不適な部分があるといわざるを得ない。

その意味で、これからの文化研究において、「popular」をどのように定義づけ機能させていくかは、大きな課題となるといってもよい。

大衆文化研究の対象と方法

大衆文化を「大衆が生み出した文化・大衆が担う文化」と定義するとき、その「大衆とは誰か」

という問題が生じる。また、「社会の広範囲に普及した文化・メディアに伝達される文化」と定義するとき、「どのように・何によって」という問題が生じる。

さらに、大衆文化の「題材/研究対象とは何か」という問題が生じる。もちろん、多くの場合、テレビ・マンガ・大衆小説・ポピュラー音楽（流行歌）・映画・スポーツなどがあげられる。しかし、それだけではないはずである。

そこで、新旧2種の大衆文化論の入門書の内容を確認してみることにする。

1冊目は、江藤文夫らによるものである。(江藤 et.al 1973) 同書は1973年に刊行されたものだが、その内容はむしろ60年代的な着眼点によるものといってよい。

社会派ミステリという新ジャンルを確立させた松本清張。「暮らしの手帖」を題材とする「消費者」という存在。NHK大河ドラマやニュース・キャスター論などの放送メディア。そして、ベトナム戦争と日本/日本人の関係性。(tab.2) いずれも、高度成長を背景に大きく変化した日本/日本人を理解する上で、重要なキーワードといってよい。

Tab. 2 「大衆文化の創造」目次

序論 大衆の時代・大衆の文化 “戦後”を考える
1. 戦後を構想する 松本清張の世界 大衆的叙情をたちきるもの・『暮らしの手帖』の発想と方法・『いじわるばあさん』を考える 日常の中の笑い・美空ひばり考 一つの戦後体験
2. 時代を生きる 竜馬像の変遷 戦後によみがえる像・『羅生門』の方法 歴史を推理する・ニュース・キャスター論 放送のことばをつくる
3. 大衆の参加 「声」一九六五年 ベトナム戦争と日本人
4. 創造の論理 『花の生涯』から『国盗り物語』まで 大型ドラマ論・『夫婦善哉』の話法 しろうとの語り口・『芸者』を製作する 「人間の記録双書」の誕生・『ガロ』—その誕生と風化 劇画の夢想と現実・トップ記事の制作 大衆文化の尖兵
5. 生活を演出する オマケと付録の研究 庶民生活と商法・百科事典精神 教養としての大衆化
6. 現代を作る 『日曜娯楽版』以後 放送と一緒に育って・サントリー宣伝部 時代を広告する・ノンフィクション・クラブ 大宅壮一とその周辺

Tab. 3 「戦後日本の大衆文化」目次

1. 戦後日本の大衆文化を考えるために
2. 暮らし 学校給食・冷蔵庫・ファミリーレストラン
3. 家族 結婚式と披露宴・子ども部屋・ゴールデンウィーク・ペット—気軽さと尊さのはざままで
4. からだ 健康法—二一世紀の願掛け・化粧—変わらない化粧・変わりゆく化粧
5. 遊び 野球・海外旅行—わたしたちは今どこにいるのか・大道芸・写真
6. 大衆文化のとらえ方—子どもの遊びの戦後史を素材として

2冊目は、鶴飼哲夫らによるものである。(鶴飼 et.al 2000) 同書は、江藤らのものと比較すると、表現やメディアよりは生活様式に関連したものに着眼がある。

すなわち、「くらし・家族・からだ・遊び」という大項目のもと、ファミリー・レストランや結婚式、あるいは健康法といった題材を扱っている。なかでも、「家族」の項目に「ペット」が入っているところは興味深い。(tab.3)

この2冊は、古典的名著とか問題作というわけではない。(注2) ただし、対照的ではある。鶴飼らは、同書の序論部分の中で以下のように記している。

この本で取り上げている各テーマは、従来の大衆文化論とはやや毛色の変ったものとなっている。

それが、この本の特徴である。

従来の大衆文化の研究書で扱われているのは、テレビ、マンガ、大衆文学、スポーツ、犯罪など、いかにも「大衆文化的」なものごとが多い。

事実、江藤らの本の目次だては、「犯罪」が抜けているだけで、「従来の研究書」に沿ったものになっている。(注3)

逆に、共通点もある。江藤らの本の序論に「“戦後”を考える」とあり、鶴飼らも上述の文章に続けて、以下のように書いている。(鶴飼 ibid.)

「大衆文化」というジャンルを設定するのではなく、戦後という時代を特徴づける、社会の広範囲に普及したものごとを、文化という視点で読み解くことで、「大衆文化論」を展開することを試みたのである。

すなわち、一方は戦後28年たった時点で、もう一方は55年たった時点で、自分たちの時代と文化を「戦後」という文脈から理解しようとしているのである。さらに、鶴飼らは、戦後を今日にいたるまで続くものとして、また今日という時代が戦後の上に成立していると考え、同書を執筆している。

戦後の日本が「アメリカ化」の道を歩んできたことは事実である。しかし、それは日本に限ったことではない。また、だからこそ、多くの国で自国文化のアメリカ化(の弊害)について論じられることになる。

だが、アメリカ化は問題なのか。問題であるのなら、どのような点において問題なのか。工業化と大量生産に基礎づけられる生活スタイルがアメリカ化の特徴であるとしても、しかし、それは多くの国が求めた「豊かさ」の基本なのではないか。また、マスメディアによって提供される娯楽の質に問題があるというとき、しかし、それを「問題視」するのは一部の知識人だけではないのか。

今日、日本人が享受している大衆文化/ポピュラー文化が、いかなる基盤の上でありいかなる経緯の果てにあるのか。戦後60年の歩みを「アメリカ文化の受容=アメリカ化」の文脈でとらえることができるとき、さらにそれ以前の歩みについても目を向けるべきであろう。すなわち、近代

史という文脈からの西欧文化の受容過程という視座である。

日本近代における洋楽/ポピュラー音楽受容の前提条件

前項までのような認識に立ち、以下、明治期からのポピュラー音楽の受容について確認する。

明治期にはいっても、音楽/大衆娯乐的には江戸時代のままであったとあってよい。つまり、長唄・義太夫・常磐津、寄席・芝居などなどが、一般庶民にもっとも近い芸能であった。そもそも、いわゆる洋楽が人々の耳目を集める機会が限られていたからである。

また、この頃の東京という都市の範囲は、神田・日本橋を中心に半径4キロ程度のものであった。いいかえれば、東京の境界線は、次のようなものであった。

東＝本所・深川 西＝四谷・信濃町 南＝三田・田町 北＝上野

ただし、地域によって、音楽受容のあり方には相違があった。

1. 神田・日本橋・浅草
下町：都市自営業者
従来の居住圏内での寄席通いなど
2. 赤坂・麴町・四谷
山の手：中流階層（官吏・教員・軍人・会社員）
西欧音楽の受容 ← 江戸の都市文化と無縁
3. 本所・深川（隅田川以東）
川向こう：明治後期に発展する零細工場群
浪花節の流行（もともと街頭の下品な芸能）

これらの地理的条件の上に、音楽のチャンネルが成立しまた変化していくことになる。基本的には、江戸期からの俗謡などが生き残っており、その焼き直しが歌われていた。これに西欧音楽が加わっていくという構図である。

従来型のチャンネルとしては「寄席」があり、明治期になってからは浪曲の隆盛があり義太夫も人気があった。ことに、関東では明治20年頃、娘義太夫が人気を博すことになった。

そこへ、演歌師が登場する。内容的には瓦版・読売の延長線上だが、バイオリン使用しているところが新しく、また多くの人々にとって、西欧の楽器の音色に生で接する初めての体験となった。当初は国・政治への批判（壮士節）を語り、やがて風俗描写を中心とする書生節へと変化するが、音楽的に西欧化されていたわけではない。

なお、彼ら演歌師はただ歌うだけでなく、歌本を販売することによって利益を得ていた。

その意味で、明治期の音楽/音楽文化の西欧化において、重要な役割を担っていたのは学校というチャンネルであったとあってよい。1880/明治12年に「小学唱歌」が制定されるが、お雇い外人メイスンによる選曲（賛美歌も多かった）ということもあり、西欧のリズム・音程・ハーモニーは徐々に日本人に浸透することとなる。

音楽受容に限ることではないが、学校教育制度の完成と教育の普及は、日本全国の子どもたち

が、同じ考え方を身につけることを意味する。(注4) いいかえれば、近代化による平準化は、社会における「わたし」が一元化されていく過程でもある。ことに、明治期の日本にあっては、天皇制の確立と安定のためにも、「国民」を一元化することは重要な課題であったからである。

いずれにせよ、明治という時代は、江戸期までの「音曲」が、西欧的な「音楽」に置きかわる時期であり、何より「日本人の音感覚」が西欧化される最初のステップであったといえる。

余暇という視点

国民を一元化する上で、もうひとつの重要な要素はマスメディアである。タイムラグをほとんど生じさせず、全国に一斉に情報を伝達できるという機能はこれまでになかったものである。

メディア環境の整備は急速に進み、明治30年代には映画の常設館が開館し、レコードも発売されていた。しかし、多くの人々にとって、それらを日常的に楽しむほどの環境や経済的状况にはなかった。明治40年前後の東京市の人口は約270万人だったが、そのうちの約70万人は「下層」と分類される人々であった。

それらを職業構造別にみると、鉱工業：28万人・商業：22万人・公務自由業：9万7千人・交通業：7万3千人・日雇い業：2万2千人・農林水産業：8千人である。また、工場労働者の工場規模をみても、1-4名の零細なものが71%をしめている。(石川 et.al 1981) いいかえれば、当時の東京市に暮らす人々の1/4は余暇を楽しむ余裕がほとんどなかったということである。

そうした状況が変化するのは、大正期になってからである。産業構造が変化することにより、農村人口が都市流入するようになる。そして、雇用労働者型の生活構造を持つ社会階層（工場労働者・サラリーマン）が登場することになる。それは、労働問題をはじめとする新しい社会問題を噴出させるとともに、「余暇」という生活のスタイルを登場させることになる。つまり、社会・生活構造の変化が余暇を成立させたのである。

いわば、大正期とは「近代的な都市の生活スタイル」が根つき始める時期であった。貧富の差は激しいが、人々はそれなりに生活を楽しもうとしていく。また、大正デモクラシーや自由教育といった運動が開始される。

大正初期はまだ貧しい状態にあるが、生活水準は急速に向上していく。工場労働者の1916/大正5年の実収入が28.51円であったものが、1927/昭和2年には122.03円となる。また、1919/大正8年から1927/昭和2年の間の、工場労働者の家計支出構造において、修養・娯楽費の比率が1.4%から4.6%へと向上している。(石川 ibid.)

こうした中、蓄音機・レコードの生産が本格化し、われわれが今日考える歌謡曲が開始される。また、伝統的な俗謡ではない音楽を労働者の娯楽にしようという考えが出始めるのもこの時期である。たとえば、中山晋平による「須坂小唄」は、休日を健全に過ごすために「女工の歌える歌」という注文によって作られたものである。

さらに、娯楽産業の大規模化・独占化の進展が余暇生活への影響が問題化したことを受けるかたちで、1920年代には日本の余暇研究が開始されるにいたった。たとえば、余暇研究の先駆者で

ある権田保之助は、多くの興味深い調査・研究をおこなっている。

たとえば、「東京帝大・大阪帝大・神戸商大」の3校の学生を対象とした学生娯楽に関する調査では、以下の5領域が上位を占めていることがわかる。(石川 *ibid.*)

散歩・旅行・スポーツの類……………	22.9%
映画・演劇の類……………	19.3%
音楽・レコード・ラジオの類………	18.4%
囲碁・将棋・マージャンの類………	15.3%
文学・芸術の類……………	12.5%

「音楽・レコード・ラジオの類」における結果の解釈は困難であるが、当時の国民全体からみれば大きな値であるといつてよい。これは、大学生というエリート層での結果であるとともに都市部の結果であり、農漁村などに暮らす人々の実態とは異なるからである。

ただし、権田は、普及過程におけるラジオの困難点を指摘しつつ、最終的には「慰安放送に於ては都会と地方との差別」は考える必要がないと結論づける。これは、メディアの特性を喝破したものであると同時に、今日のメディアの空間越境性を思うと興味深いものがある。(南 1988)

少しく時期が異なるが、昭和15年に朝日新聞が実施した地方娯楽に関する全国調査では、「レコード音楽利用：6名」「流行歌・歌謡曲等：40名」になっている。当該報告書中にあるように「常設映画利用：393名」「演劇（観劇）：302名」と比較すると、「音楽の大衆性の希薄」さがうかがわれる。(南 *ibid.*)

ただし、「ラジオ利用：601名」という結果から、音楽受容のチャンネルとして機能した部分の大きいことは十分推察されよう。

さらに、昭和期にはいると、マスメディア産業の隆盛期を迎えることとなる。ラジオの普及率でみると、1926/大正15年頃は3%（契約者数＝約34万件）であったものが、1937/昭和12年には30%を超え、1944/昭和19年には50%に達する。

これは、学校とは別のチャンネルで、日本人が同じ歌を歌う体制が整ったことを意味するものといつてよい。とはいえ、当時は日本放送協会（今日のNHK）1局しかなく、実質的に番組選択の余地はない。そこへ、勢力を増大させた軍部が介入することにより、情報の一元化が国家の意向の伝達を促進させることになる。たとえば、竹山は、当時のラジオ利用がナチス・ドイツのそれをモデルとしていたことを指摘しつつ、「音楽もまたプロパガンダの重要な要素」であることを再確認している。(竹山 1994) なお、クラシック音楽/楽壇が中心であるが、近年、戦時下の音楽文化の利用について研究が進みつつあることは重要な進展である。(戸ノ下 2008) また、1934/昭和9年の出版法改正によるレコードへの検閲の開始は、人々の余暇活動としての音楽聴取に影響を与えることとなる。(tab.4)

Tab. 5-1 大阪のラジオ番組愛好率 (昭和6年) Tab. 5-2 ラジオ番組各種目嗜好率 (昭和12年)

	家にきく録音		最も好きな種目	
	記入者総数 (人)	比率 (%)	記入者総数 (人)	比率 (%)
長 州	49,097	47.3	14,406	13.9
清 元	32,677	31.4	5,844	5.6
常磐津	32,502	31.3	5,897	5.7
義太夫	63,615	61.3	28,062	27.0
謡 曲	28,729	27.7	9,436	9.1
新 内	28,660	27.6	5,111	4.9
亭楽・三曲・地唄	35,057	33.8	8,920	8.6
尺 八	41,954	40.4	9,284	8.9
びわ	59,665	57.1	18,722	18.0
歌 沢	27,935	26.1	5,024	4.8
小 明	52,027	50.1	10,879	10.5
落唄・俗謡	52,953	51.0	12,837	12.4
地方謡謡	46,666	45.0	10,324	10.0
新民謡	34,983	33.7	6,170	5.9
新日本楽	27,416	26.4	5,031	4.8
浪花節	86,595	83.5	55,735	53.7
ラジオドラマ	59,868	57.3	17,793	17.1
管弦楽	32,127	31.0	9,871	9.5
吹奏楽	28,792	27.7	6,902	6.7
室内楽	16,256	15.7	3,305	3.2
ピアノ	19,323	18.6	3,644	3.5
バイオリン	23,588	22.7	6,533	6.3
声 楽	20,598	19.9	5,476	5.3
歌 劇	26,511	25.6	6,591	6.4
マンドリン	18,038	17.4	3,521	3.4
ハーモニカ	30,195	29.1	7,576	7.3
調査総数(照会カード)	243,318			
回答数(100%)	103,757		80,160	23,597

放送種目	嗜好率 (%)	放送種目	嗜好率 (%)
義太夫	39.7	アコーディオン・ハーモニカ	30.5
常磐津	17.5	ジャズ	22.8
清 元	17.6	ラジオドラマ	78.5
新 内	22.7	放送舞台劇	63.6
長 州	35.3	舞台劇中継	61.7
うた沢	13.1	能・狂言	13.3
小明・落唄・俗曲	44.7	レビュー	23.3
古曲(一中・西東・黄江等)	6.2	少女歌劇	31.9
雅 楽	8.8	映画劇	62.6
謡 曲	18.7	ラジオ風楽・ラジオスケッチ	67.7
亭楽・三曲	33.6	浪花節	83.6
尺 八	49.0	談 話	77.0
びわ	54.8	落謡・人情ばなし	78.7
詩 吟	54.6	漫談・モダン小ばなし	69.0
歌謡・民謡	49.2	万 才	75.4
新日本音楽	34.8	声色・物まね	47.4
歌謡曲	75.5	寄席中継	71.8
国民歌謡	64.3	ニュース演説	78.4
唱歌(軍歌・校歌・産産歌等)	55.2	ラジオ小説・物語	60.5
和洋合奏	45.0	名作朗読	31.6
管弦楽	32.5	録音朗読	22.8
室内楽	25.2	レコード音楽・トーキー音楽	33.4
吹奏楽	37.1	射 球	63.6
ピアノ・オルガン	24.5	壁 球	9.3
バイオリン・チェロ	29.7	野球(サッカー・ラグビー)	8.6
フルート・クラリネット	20.3	陸上競技	34.2
木琴・鉄琴	33.2	水上競技	44.4
歌 劇	30.8	ボートレース	11.3
合 唱	23.5	ボクシング	14.2
独 唱	33.0	テニウ	55.5
マンドリン・ギター	31.5	柔剣道	15.8

(増井 1980)

そうした音感覚の変化は、個人のレベルに還元されるだけでなく、階層や年代などの複数の要因が介在し、量的に把握することは困難である。加えて、明治期には録音された音源が少ないこともあり、十全な研究をおこなう上で困難な点が多い。

同時に、選好の問題についても、レコード売上げの正確なデータは少なく、そもそもレコードを購入していない「口伝え」で楽曲を覚えた層を把握できるわけではない。それでも、出版された楽曲の記録は残されており、そこから当時の日本人がどのようなものを好んだのかを把握することができる。

そして、そうした作業を厳密におこなった先駆者として、見田宗介の名をあげることができる。見田の業績はポピュラー音楽研究にとどまるものではなく、「社会意識を探る」という動機から、人々の記録にあたるという手法をとっている。すなわち、日記であり雑誌などへの投書への着目であり、大衆文化の表層としてのポピュラー音楽/流行歌への着目である。(見田 1967)

見田は、明治期から昭和 30 年代までの流行歌/歌謡曲の歌詞分析をおこない、時代設定・素材の選定・モチーフの分類などから、日本人の「心情」と時代のあり方の関係について論じている。

(tab.6)

近年のポピュラー音楽研究においては、歌詞の内容分析は主流ではなくなっている。たとえば、叫び声や意味のない歌詞などの非音楽的要素が、ポピュラー音楽では大きな意味をもつことがある。よって、音楽/楽曲の理解を歌詞内容のみでおこなうことには限界がある。また、それらの相乗効果が考慮されない研究に終わりがちであった研究動向への反省という側面もある。

Tab. 6 流行歌における心情のモチーフ

7年区分	モチーフ 曲数	a	b	c	d	e	f	g	h	i	j	k	l	m	n	p	q	r	s	t	u	w	
		批 判	風 刺	怒 り	う ら み	や け	自 嘲	お ど け	喜 び	希 望	願 気	義 侠	慕 情	甘 え	こ び やか し	あ ま き ら め 練	孤 独	閉 塞 感	郷 愁	あ こ が れ	漂 泊 常 感		
①明治1～明治7	33	6.1	12.1		6.1	6.1	3.0	57.6	6.1	6.1	6.1	3.0	9.1	6.1	6.1	12.1							
②明治8～明治14	20	10.0	25.0			5.0		70.0		5.0	10.0	5.0	5.0		5.0	15.0							
③明治15～明治21	34	20.6	11.8	11.8	2.9	5.9	2.9	32.4	2.9	11.8	23.5	11.8	5.9		2.9	2.9					2.9		
④明治22～明治28	36	19.4	11.1	13.9	2.8	8.3		19.4	25.0	25.0	16.7	5.6	2.8	2.8	2.8	2.8		2.8	5.6	5.6	5.6		
⑤明治29～明治35	38	5.3	2.6	2.6				18.4	15.8	7.9	5.3	7.9			13.2	7.9		5.3	5.3	5.3	7.9		
⑥明治36～明治42	32	18.8	28.1	12.5	28.1	9.4	21.9	15.6	3.1	6.3	3.1	15.6		3.1	21.9	21.9		15.6	3.1		18.8		
⑦明治43～大正5	29	3.4	20.7	3.4	6.9	20.7	13.8	31.0			3.4	20.7			24.1	6.9			3.4		17.2		
⑧大正6～大正12	21	9.5	19.0			19.0	23.8	19.0	4.8	4.8		19.0			9.5		9.5	9.5	4.8	4.8	23.8		
⑨大正13～昭和5	36		2.8		5.6	2.8	8.3	11.1	11.1	5.6	2.8	22.2	5.6	2.8	8.3	16.7	22.2		13.9	5.6	22.2		
⑩昭和6～昭和12	44				4.5	6.8	11.4	2.3	18.2	9.1	4.5	13.7	34.1	4.5	4.5		18.2	29.5	6.8	6.8	4.5	40.9	
⑪昭和13～昭和19	30				6.7	3.3	3.3	6.7	10.0	16.7	13.3	16.7	20.0	3.3			20.0	13.3	3.3	23.3	16.7	36.7	
⑫昭和20～昭和26	36	2.8			2.8	8.3	2.8	8.3	11.1	8.3	8.3	2.8	55.6	2.8	2.8	2.8	22.2	19.4	2.8	19.4	11.1	19.4	
⑬昭和27～昭和33	28				10.7	10.7	10.7	3.6	3.6	7.1	3.6	7.1	60.7	7.1		7.1	50.0	14.3	3.6	10.7	7.1	28.6	
⑭昭和34～昭和38	34		5.9		2.9	5.9	14.7	11.8	11.8	11.8	2.9	8.8	50.0	11.8	5.9	2.9	23.5	23.5	2.9	11.8	5.9	23.5	
実数	451	30	40	15	26	34	40	91	44	25	38	34	109	18	15	37	62	47	15	37	22	81	
計 %		6.7	8.9	3.3	5.8	7.5	8.9	20.2	9.8	5.5	8.4	7.5	24.2	4.0	3.3	8.2	13.7	10.4	3.3	8.2	4.9	18.0	

だが、内容分析という手法の有効性そのものが失われているわけではない。さらに、時代や文化の心理を歴史的な展開の中から把握しようとするとき、見田の仕事はあらためて評価されるべきものと考えられる。

ところで、そうした社会心理史的研究をおこなう上で忘れてならない部分として、統計的・数量的データに依拠しない方法と着眼点の問題がある。見田の作業は精緻なものであり、かつ十分な基礎データを前提としたものである。

しかし、ある時代の人と音楽が、どのような歴史的・文化的な背景によって機能するかを理解しようとするとき、いわゆる最頻値的なものや典型的なものだけに依拠しては見えなくなる部分があることも事実である。

tab.5-1 および 5-2 からあきらかなように、戦時下という要因にもとづく国民歌謡を除けば、昭和という時代のある時期まで、日本人の多くが好んでいた音楽は琵琶であり浪花節であり唱歌であった。それは、単なる表現様式の問題ではなく、そこに歌われ奏でられる内容と音に対する理解の問題であるといつてよい。

逆にいえば、日本人はいつから浪花節で語られる内容を理解できなくなっていたのか。そうした点に着目することで、日本/日本人の近代化の過程を跡づけることも可能ではないだろうか。

そして、そうした作業をおこなう上でのひとつのヒントとして、「ドリフターズ」を考えてみることは有用と思われる。ドリフターズは、1970-80年代に人気のあったコミックバンドである。同じくコミックバンドとして60年代に国民的な人気を誇った「クレージー・キャッツ」の後継者として、ことに若年層へ強い影響力をもったバンド/集団である。

彼らは、テレビ番組に出演するうちに音楽を利用したギャグをおこなわなくなっていった。しかし、定期的にレコード録音をおこなっている。このときの彼らのレパートリーは、ある意味で、日本の音楽文化の歴史と多様性をなぞるものといってよい。すなわち、小学唱歌・軍歌/兵隊ソング・民謡・ノベルティソングなどであり、さらにその替え歌であったりする。それらはヒットチャートに上るものではないが、長い期間、日本人の耳になじんできたものである。

高視聴率を誇ったレギュラー番組「8時だよ！ 全員集合」のテーマソングは「北海盆歌」であり、特別番組「ドリフ 大爆笑」のテーマソングは国民歌謡の「隣組」である。

70年代の子どもたちは「隣組」を知らなくても、家族の誰かは知っており、その由来を教えることもあっただろう。民謡になじみも興味もない子どもたちも、毎週、楽しみにしている番組のテーマソングが、他の西歐的な構造を有する楽曲と異なることを体感していただろう。

伝統的な日本の楽曲と西歐の楽曲が混在することで培われてきた明治以降の日本人の音感覚の系統図の最後の部分にドリフターズとその聴取者はいたのだといってよい。そして、ドリフ以後の、しかしヒットチャートとは異なる部分に着目することが、今後のポピュラー文化研究において必要とされるものと考えられる。

まとめ

本稿は、大衆/大衆文化の概念を整理しつつ、ポピュラー文化/ポピュラー音楽研究における、近代史的接近の重要性を示唆するとともに、明治期以降の音楽選好および音感覚の変化に関する研究法での問題点を再検討したものである。

少なくとも、ポピュラー音楽研究の目的の一部に社会と個人との関係性の理解があるとき、その社会の成立過程への理解は不可欠なものとなる。また、統計資料の整わない時代における表現/作品と人々の選好のあり方を理解する上で、見田の手法は再評価に値するものと考えられる。しかし、それだけではなく、古い表現様式がどのように残り変化しつつも生きのびてゆくかという部分を、時代の流れを追いながら拾い後づけていくような手法もまた重要であろう。

日本近代における洋楽受容の研究は、クラシック音楽を中心とするものが多いが、ことに余暇の視点から日本人の生活へのポピュラー音楽の受容と普及について、さらなる研究が望まれるものである。

注1 現代社会論は、おおむね、以下のようなテーマの変遷を遂げている。

30-40年代：大衆社会論

50-60年代：脱工業社会論・大衆消費社会論

70年代以降：情報社会論

注2 両書は、狭義の概論書ではないといってよい。いわゆる概論書としては、最新のものをみても、従来の個々の大衆文化を対象としていることが通例である。(渡辺・伊藤 2005)

第Ⅱ部 ポピュラー文化のフィールドワーク

お笑い・ポピュラー音楽・演劇・ストリート・マンガとゲーム・消費行動

第Ⅲ部 第14章 ポピュラー文化のテーマ案内

テレビ・インターネット/電話/携帯・文学・映画/レンタル/ミニシアター・雑誌/活字・音楽・風俗/性風俗・食フード/産業・住まいと家族・道/乗り物/ツーリズム・スポーツ・遊び/ゲーム/ギャンブル

注3 なお、江藤らのものは「講座・コミュニケーション」という叢書の1冊であるために、各項目はマスメディア関連のものになっている。しかし、そもそも大衆文化の定義から考えれば、そのこと自体はとくに欠点ではないといえる。

注4 就学率は徐々にあがっていくが、実際の登校率は低い。(ことに女子生徒)

Reference

- 江藤・鶴見・山本(eds) 1973 大衆文化の創造 講座・コミュニケーション4 研究社
石川弘義(ed) 1981 娯楽の戦前史 東京書房
増井健二(ed)1980 データ・音楽・につぼん 民音音楽資料館
南博(ed) 1988 遊戯・娯楽「近代庶民生活誌8」 三一書房
見田宗介 1967 近代日本の心情の歴史:流行歌の社会心理史 講談社
櫻本富雄 2005 歌と戦争 アテナ書房
竹山昭子 1994 戦争と放送 社会思想社
戸ノ下達也 2008 音楽を動員せよ 青弓社
鶴飼・永井・藤本(eds) 2000 戦後日本の大衆文化 昭和堂
渡辺潤・伊藤明己(eds) 2005 <実践>ポピュラー文化を学ぶ人のために 世界思想社
山中恒 1985 ボクラ少国民と戦争応援歌 音楽之友社
矢沢寛 1994 流行歌気まぐれ50年史 大月書店
吉田禎吾 1987 文化 石川 et.al 「文化人類学事典」 有斐閣
吉見俊哉 1995 声の資本主義 講談社
吉野健三 1978 歌謡曲-流行らせのメカニズム 晩聲社